



球技（ネット型）におけるパデル導入に関する実践 報告（2年次）

藤本，佳昭

(Citation)

研究紀要：神戸大学附属中等 論集, 8:39-44

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487688>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487688>



実践報告

球技（ネット型）におけるパデル導入に関する実践報告（2年次）

Practice report on the introduction of Padel in net ball games (2nd year)

藤本 佳昭

FUJIMOTO Yoshiaki

パデルの実践研究2年目は、思考力・判断力・表現力等の観点を育成するために効果的な授業展開を明らかにすることを目的とした。PDCA サイクルを基に、アンケート調査と期間記録法を用いて検証した結果、次の授業展開が効果的であることが明らかになった：課題の提示→技術指導（技能のコツ）→提示された課題解決に向けた練習方法の設定→練習→ゲーム→グループでの学習成果の確認→クラス全体でのシェアリング→クラウドを用いたシェアリング。生徒の学習成果をクラウド上に掲載した結果、約60%の生徒がクラス学習成果を閲覧し、約30%の生徒が、他クラス学習成果も閲覧し、自らの学習成果と比較し、改善を行ったことが分かった。

The purpose of the second year of practical research on padel was to clarify effective lesson development to foster perspectives such as ability to think, to judge, and to express themselves. Based on the PDCA cycle, the following class development was found to be effective as a result of the survey and the class recording method: Presentation of the lesson objective → Skill instruction (tips on skills) → Setting up a practice method to achieve the objective → Practice → Game → Share learning outcome as a group → Share the outcome as a whole class → Share the outcome as the whole grade using clouds. The results of posting student learning outcomes on the cloud showed that about 60% of the students viewed the class learning outcomes, and about 30% of the students also viewed the other class learning outcomes, compared them with their own learning outcomes, and made improvements.

キーワード：パデル 球技（ネット型） 体育 思考力・判断力・表現力 指導方法

Key words: Padel Net type ball game Physical education Thinking・Judgment・Expressive ability Teaching method

I はじめに

2023年度より、日本パデル協会の協力を受け、ネット型球技（パデル）の授業を開始した。感染防止の観点から、生徒間の距離を保つことができるネット型スポーツを教材として、選択する機会が増えていたことも理由としてあった。用具・施設の面からも、導入しやすい利点などがあったことも影響している。

1年間、パデルの授業を実践してみて、パデルという種目の魅力を感じた。

図1の第1回終了時点のアンケート結果（2022年度）では、96%の生徒が、“大変またしたい”も

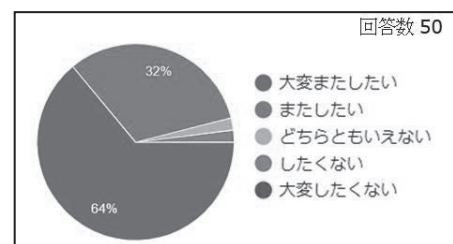


図1 第1回終了時点の率直な気持ちを教えてください（2022年）

しくは“またしたい”を回答している。

パデルの魅力は、豊富な運動量がある一方で、壁があることから、体力的な負担をかけずにプレーすることもできるということが挙げられる。また簡単ではあるが、戦略的な面があることから奥深いということも魅力として挙げられる。この3つ

の魅力を備えたのがパデルである。この魅力については、2022年度、パデルの授業を実施した際に、授業者としても実感している。

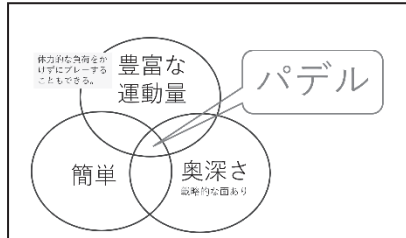


図2 パデルの魅力について

小学校学習指導要領解説体育編（2017年6月）に「テニスやバドミントンを簡易にしたゲーム」という例示がなされた。小学校では、テニスの簡易型ゲームとして考案された「テニピン」を導入する小学校が増えており、実践研究が進められている。筆者は、小学校で行われたテニスやネットを簡易にしたゲーム（例：テニピン）から、中等教育6年間の系統性を意識したネット型球技カリキュラムの在り方について研究を行っている。

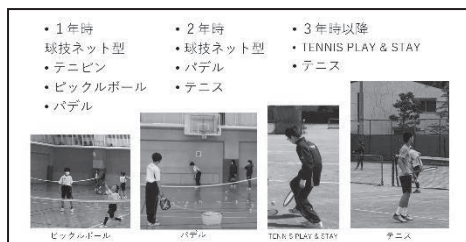


図3 6年間の系統性を意識したカリキュラムマネジメント

現学習指導要領では、主体的・対話的・深い学びという教育活動を活性化させることが求められている。今年度（2年目）については、本校の協同学習の伝統と実践の象徴である小集団学習を取り入れた授業展開を計画・実施し、検証を行う。加えて、コロナ禍以降、急激に進んだICTも活用した実践結果を報告する。

II 本実践の目的

学校教育の現場において、ネット型球技の選択肢となる種目として、定着するためには、現行学習指導要領における3観点に基づいた、指導法と評価法を確立させることが求められる。2022年度は、

主にパデルを実施するための環境づくり（強化ガラスの代わりに体育館壁面を使用する）やパデルに親しむために必要な基本的な技能や動きを習得するための指導法・授業展開について、実践研究を行ってきた。

今年度の実践については、思考力・判断力・表現力等の観点を育成するために効果的な指導法・授業展開を明らかにすることを実践の目的とした。

また生徒と共に授業を作り上げる活動を通して、生徒と指導者の共同エージェンシーを現出させることについても本実践の目的とした。

学校体育で、パデルの指導法・授業展開が、まだ確立されていないことから、2023年度の授業実践を通して、学校教育の現場に役立つ指導法・授業展開を確立することを目的とした。

III 本実践の方法

・授業環境について（2022年度と同様）

体育館の壁面を、パデルの壁面として代用した。壁面は、片側のコートにいるプレーヤーのみが使用できる環境で授業を行った。バドミントンの支柱やネットをパデルのネットとして代用し、パデルのボールは、硬式テニスのボールで実施した。

・生徒について

対象生徒は、1年時に、日本パデル協会から提供・監修して頂いた授業プログラムを4回受講しており、起源や歴史、世界や日本での競技者の現状などを含め、技術の名称や行い方、基本的な技能や動きを身に付けている。また、基本的な技術習得のための練習の仕方について、習得している。

・授業内容について

中等教育学校生徒（中2相当66名、男子35名、女子31名）に対して、約20人のグループごとに、計6回パデルの授業を実施する。授業内容は、次の通りである。

【1回目授業】

オリエンテーション
既習技術の確認

学習の進め方について

ダブルスでの時間制ゲーム

【2～5 回目授業】

課題の提示（※1）

グループワーク（小集団での協同学習）

- ・提示された課題解決に向けた練習方法の設定
- ・グループでの練習
- ・時間制ゲーム（3分×2、チェンジコートあり）
- ・学習成果の確認

【6 回目授業】

- ・パデル大会

※1 提示した課題について（①～④）

- ①壁を使用して、打ち返したりすることができる。
- ②ネット付近で、打ち返したりすることができる。
- ③ポジションの役割に応じて、打ち返したりすることができる。
- ④味方の動きに合わせて、コート上の空いている場所をカバーすることができる。

単元終了時に、質問紙調査（フォーム）を実施。

質問紙調査終了後、生徒の考えを踏まえ、後半グループの授業改善に繋げる。

手法は、PDCA サイクルを用いることとする。具体的には次の通りである。

授業計画→授業実践→授業評価（質問紙調査・授業期間記録）→授業内容改善

学習成果の確認を行うための、話し合い活動については、十分な時間を確保する。グループの枠を越えて行う学習効果の確認は、認知学習場面の時間・運動学習場面の時間確保のため、ホワイトボードの記述をクラウド上に掲載することで、シェアリングとした。

授業時間がどのように配分されたかについては、授業期間記録の手法を用いて、検証を行う。他の型の球技の授業期間記録（学生が模擬授業で実践を行った授業期間記録）との比較を行う。

IV 結果と考察

今回の授業実践は、課題の提示→グループワーク→提示された課題解決に向けた練習方法の設定→グループでの練習→時間制ゲーム→学習成果の

確認を1回の授業のサイクルとして、4回実施した。2回目以降、話し合い活動に、慣れてくることから振り返りも具体化した。

授業後の生徒の感想は、次の通りである。

【感想より抜粋】

・自分ができなくても同じチームの人が色々コツとかを教えてくれたり先生が優しく接してくれたので、授業に取り組もうという姿勢ができたと思います。

・昨年度は自分たちで練習を考えるのではなく先生が教えてくださるという方式だったが、今年度は自分たちで練習を考えることができたので、去年よりかは自分たちがしたいことをすることを有効だと思う練習法ですることができた。また、チームとして一つのことをしていたので楽しめた。楽しかった。

これらの感想より、生徒達での話し合いや教え合いなどの学び合いが活発に行われたことが読み取れる。



写真1 学習成果の確認場面

本単元では、リーダーを当番制とし、必ず1回以上、グループのリーダーとして、話す機会を設定した。その活動についての振り返り結果は、次の通りである。

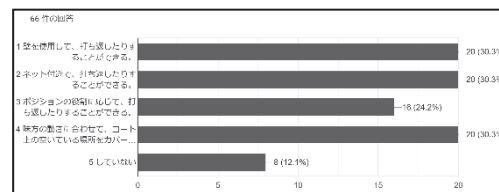


図4 何回目の授業でリーダーをしましたか。

12%の生徒が、何らかの理由でリーダーを行うことがなかった。体調不良で欠席するなどが理由の1つとして考えられる。

本校のリーダーを中心として行われる協同学習は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱となる資

質能力を育むための学習方法であり、すべての生徒に1回以上グループのリーダーとして、協同学習を実施する経験をさせることができなかったことは、今後、改善していかなければならない。

本実践では、授業者より課題の提示を最初に行った。この技術的な課題が、適切であったかについて、振り返りを実施した。生徒にとって適切と感じた課題は、順に②、④、③、①【先述した、提示した課題について(①～④)を参照】という結果となった。②④の課題を設定した授業では、グループで設定した練習方法が、時間制ゲームで上手く活かされたことにより、学習成果の確認の話し合い活動が、上手に進んだと考えられる。

表1 課題は適切であったかについて(①回答数65、他回答数64)

	◎	○	△	▲	×
課題①	39.1%	43.8%	14.1%	3.1%	0%
課題②	63.1%	23.1%	13.8%	0%	0%
課題③	58.5%	23.1%	15.4%	1.5%	1.5%
課題④	63.1%	20.0%	16.9%	0%	0%

《記号説明》◎適切 ○やや適切 △どちらでもない ▲やや適切でない ×適切でない

次に、学習成果の確認について述べる。授業後に、クラウド上にUPされた振り返りを見たかについての結果は、次の通りである。

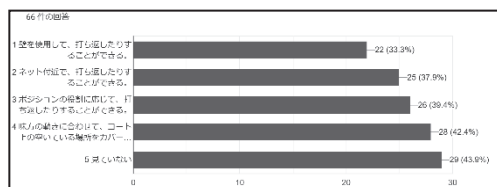


図5 授業後に、クラスルームにUPした振り返りを見たか(自クラス) 複数回答可

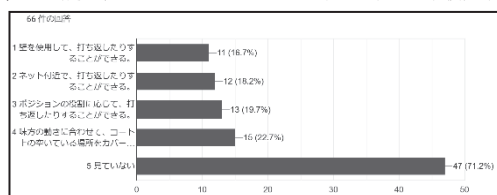


図6 授業後に、クラスルームにUPした振り返りを見たか(他クラス) 複数回答可

図5より、43.9%の生徒は、クラウド上にUPされた自クラスの振り返りを見ていないという結果となった。56.1%は、クラウド上にUPされた自クラスの振り返りを見ていることも明らかとなった。

図6より、71.2%の生徒は、クラウド上にUPさ

れた他クラスの振り返りを見ていないという結果となった。28.8%の生徒については、今回の授業実践で、振り返りをクラウド上にUPする手法を用いたことで、今まで知る機会がなかった他クラスの取り組みについて、触れることができた。授業回数を重ねるごとに、少しずつではあるが閲覧した生徒の数が、増加している。

“自他のクラスの振り返りを見た場合、どのような内容を見ましたか。もし参考になる内容があった場合は、その内容についても教えてください。”についての記述は、次の通りである。

【アンケート結果より抜粋】

・私たちの班はあまり目標に沿ったメニューを考えることができていなかったが、他の班の練習メニューを見て次回以降のメニュー考案の参考にできるものを探したり、テニスをあまり知らない人にどうやったらわかりやすく目標・メニューを伝えられる図を描けるかを見た。

・全体的な話だけれど、自分の班で立てた作戦がかなりうまく行ったと思っていたが他の班の作戦を見ると自分のところより効率が良くてびっくりした。たとえば、みんな交代で球出しする作戦を立てていたが、他のところは2対2で分かれてどちらも楽しめるようにも工夫していたなど。

これらのアンケート結果から、生徒は、自らの意思で、自他のクラスの取り組みについて、情報収集し、自らの取り組みと比較することで、改善を行うことができたといえる。

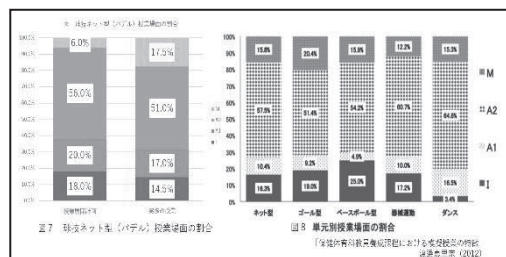
この授業手法により、達成するために必要な行動を見出す能力(授業の中で、働きかけられるというよりも自らが働きかけ、型にはめ込まれるというよりも、自らが型を作り、また授業者の判断や選択に左右されるというよりも、自らが責任を持って判断や選択を行う力)を育むことに繋がったと考える。今回のような、自クラスだけにとどまらず、他クラスの成果にまで、触れる環境を用意することは、生徒が自ら動き、情報収集や他グループとの比較や検証を行い、今後活かしていくという行動に繋がると考える。このような環境を提供していくことは、「社会の変化に対応する教育」から「社会の変革をもたらす教育」へのパラダイムシフト

を行うために、必要な仕掛けと考える。

今回は、同一学年内で、学習成果を閲覧する環境を提供することにとどまったが、今後、年度や学年や学校の枠を越えることで、生徒が、自ら働きかける行動を促す環境が用意できるのではないかと考えた。

しかしながら、43.9%の生徒が、自クラスの振り返りを見ていない結果があることから、他グループから学ぶ経験を提供するために、「学びの手応え」と題して、手応えを得たと感じた取り組みについて、クラス内で共有する活動を授業に組み込む授業展開に、後半のグループより変更した。

パデルの授業において、どのように時間配分がされたかについて、期間記録法を用いた結果は次の通りである。



《説明》I 学習指導場面 A1 認知学習場面 A2 運動学習場面 M マネジメント場面

授業展開計画時は、学習指導場面 (I) が、18%、認知学習場面 (A1) が、20%、運動学習場面 (A2) は、56%、マネジメント (M) は、6%であった。実際の授業では、I が、14.5%、A1 が 17%、A2 が 51%、M が 17.5%という結果となった。実際の授業では、授業展開計画時の配分時間より M が増加した分、他の配分時間が減少したが、認知学習場面が、17%、運動学習場面が 51%と認知学習時間と運動学習時間がしっかりと確保できていることが読み取れる。

今回の実践では、身体活動時間確保を目的に、授業終了時の全体での振り返りを省略し、各グループの取り組みについてクラウド上にアップした。そのことについて、生徒にアンケートを実施した。アンケート結果は、次の通りである。

身体活動時間が増えて良かった 74.2%、どちらでもない・どちらでもよい 24.2%、終了時の振り返りを授業時間内に行いたかった 1.5%という結果となった。

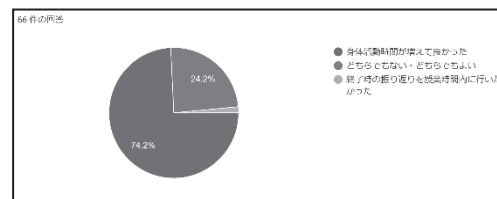


図9 身体活動時間確保を目的に、授業終了時の全体での振り返りを省略し振り返りの内容をクラウドにアップしたことについて

生徒の意見を授業に反映させるために、“パデルの授業をこのようにして受けたかったと思うことを教えてください。”というアンケートを実施した。アンケート結果は、次の通りである。

【アンケート結果より抜粋】

- ・今回のやり方で十分楽しめました。
- ・なかなか経験することができないスポーツができて、目新しいものが体験できた。とても楽しかった。また、課題設定があった為それを意識して取り組めてよかった。
- ・その日のリーダーが練習メニューを考えるという形で、なおかつリーダーが日替わりだったので一人一人のチームをまとめる力や、練習を考える力が養われたと思う。
- ・話し合いの時間は新しい発見もあったけれど、コツとか教えてもらえないと、なかなか上達できないので、生徒に協力してもらってもいいので、コツとかの説明があるといいと思いました。

これらのアンケート結果から、生徒は、今回の授業展開について、自ら考え、課題に向かって取り組んだことが読み取れる。

授業者もしくは経験のある生徒から、コツの説明を求める記述が数件あった。他の質問項目でも、考えることによる学びに加えて、教師にコツなどを教わりたい。という記述があった。教えて欲しいというニーズは、教師を信頼している証拠である。生徒が教えて欲しいと思っているのに、自分たちで考えることを優先して、教師側が教えないという授業展開を授業者が選択した場合、生徒の信頼を失うことに繋がってしまう。授業は、生徒と教師との信頼関係を土台として、行われることは、今も昔も変わらないと考える。そのニーズに応えるために、授業の導入場面で、コツを教える活動を授業

に組み込む授業展開に、後半のグループより変更した。生徒が生徒にコツを教える場面を設定したかったが、パデルは、生徒全員が、未経験から始めたスポーツのため、教師が生徒に対して、コツを簡潔に分かりやすく教えることとした。

“パデルの授業をこのようにすれば、もっと楽しくできると思う方法”について、アンケートを実施した。

ゲームに関しては、多く実施することやリーグ戦表などをつくり、賞を考え、授けるなどの記述があった。基礎的な技術獲得をすることについては、壁から跳ね返ってきたボールを打つ練習に、もっと時間をとるなどの記述があった。グルーピングについては、練習をしたい人と試合をしたい人で二つのチームを作り、それぞれのチームで課題を設定して、授業を展開する。最後は、両グループ一緒に試合をして楽しむなどの記述があった。目標設定については、先生がねらいを設定せず、試合で勝つために自分たちで何をしたらよいかを考えることで、団結力がより向上し、楽しむことができるなどの記述があった。

今後、“パデルって楽しい”等の本質的価値を感じさせたいという目標を設定した際には、上に記載した生徒の意見を取り入れた授業展開を計画したいと考える。

パデルの単元の最後に、“パデルをまたしたいかどうか”についてアンケートを実施した。その結果は、図10の通りである。

大変またしたい・またしたいという気持ちを85%弱の生徒が感じ、今年度のネット型球技（パデル）の授業を終えた。

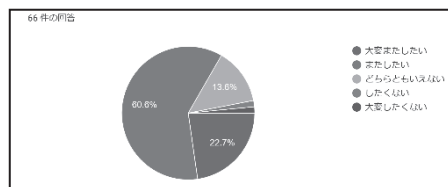


図10 率直な気持ちを教えてください（パデルの授業を終えて）

最後に

本校の生徒は、自分の感じたことを素直に教師に伝えてくれる。授業についての振り返り等の内

容を、授業内でクラスに話すことで、自らが授業をつくっているという当事者意識を育むことができる。

筆者は、「学習は、生徒と教師が、共に構築する営みである」と考えており、授業づくりにおいては、生徒と教師が教えと学びの過程を協働することを意識している。今回の授業実践のように、生徒と教師の共同エージェンシーを現出させる学習環境をどのようにデザインしていくかについて、今後も研究を続けていきたい。

謝 辞

本実践にあたってご協力くださった日本パデル協会様、本校生徒の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- (一社) 日本パデル協会資格認定委員会 (2022). 『日本パデル協会コーチ資格講習会テキスト』. (一社) 日本パデル協会
- 文部科学省 (2017.7). 『中学校学習指導要領 (H29 告示) 解説保健体育編』
- 今井茂樹 (2021). 「個が輝く！テニス型授業 テニスを教える指導者のためのガイドブック」. (公財) 日本テニス協会
- 日本パデル協会 (2016). 「パデルを知る」.
<https://www.japanpadel.com/charm-2/charm/>.
 2024年2月22日
- 藤本佳昭. (2023) 「球技（ネット型）におけるパデル導入に関する実践報告」. 『神戸大学附属中等論集研究紀要』. 7:11-14
- 渡邊恵里奈. (2012) 「保健体育科教員養成課程における模擬授業の特徴」『九州共立大学研究紀要』. 3 (1)
- 白井俊. (2020) 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—』 ミネルヴァ書房
- 日本体育科教育学会監訳 (2023). 『保健体育教育の未来をつくる』. 明石書店